

少年野球随想2

「背番号への愛着」

荒井 義一

野球に於ける背番号の始まりは、1916年大リーグのクリーブランド・インディアンスが着け、その後ニューヨーク・ヤンキースが着けたのが評判がよく1931年から正式にア・リーグが2年遅れてナ・リーグが採用・
・・と文献にある。

ともあれ野球選手にとって背番号はトレードマークであって、どんな番号であれそれぞれに愛着があり誇りを持っている。とくにプロの大スターの背番号は少年たちにとっては垂涎の的でその昔は王の「1」長嶋の「3」今ならイチローの「51」松井の「55」など皆で奪い合ったものである。

昭和27年から全国高校野球の甲子園出場選手初めてレギュラーの守備位置順に1より9までつけたのが評判をよび、以後1桁の番号を貰うのに球児達は猛練習に励むようになったのである。

*

わがチームは若い順に6年生から通し番号である。12月中旬の練習納めの日に全員より回収し翌春の2月上旬に支給する。監督から一人一人に手渡されると皆、歓声をあげる翌週、背番号を着けてきた日は北風の吹き荒ぶ寒い日だった。入団したばかりの1、2年生はグラウンドコートを着ないで飛び回っている。

「なぜ、コートを着ないのだろう?」
と私は頭をかしげるとそばにいた上級生がこ
う言った。

「みんな背番号をもらって嬉しいのですよ」

*

Mという子の母親から電話があった。

「監督さん、息子が背番号を半分に切って
くれと泣いているのです。……」

「ええッ……」

「83番じゃ嫌だと言つのです。長嶋の3
番がいいと駄々をこねています。いくら言い
聞かせても解らないのです。監督さんから
説得して頂けませんでしょうか……」

こんなに困ったことはかつてない。本人に
変わってもらって

「ビーバースは上級生から若い順なんだよ
君も6年生になれば一桁の番号になるから、
それまで我慢して、3番をもらおうよ!」
ばって……」と懇懇と話したが受話器
の向こうは、無言のままそしてまた泣きだ
してしまった。「泣く子と地頭には勝てな
い」というのがこればかりはどうしようも
ない。私は心を鬼にして受話器を置いた。
ムリもない。相手は1年生なのだから:
MはAチーム(6年生)になってセンタ
ー8番を買った。また、電話があるかなと
待っていたが、かかってこなかった。
子どもとは、放っておいても成長するも
のなんだなあ。……

(平成18年2月8日脱稿)